

第6学年1組 道徳学習指導案

平成24年 月 日（○曜日） 第○時限

指導者：尾関 基秀

1 主題名 苦しいときだからこそ 4－（1）公徳心

2 主題について

(1) 学級の児童の実態

本学級の児童（男子18人，女子21人）は，当番活動や係活動をしっかり行うことができる。また，決められたルールを守って行動し，自分勝手な理由でルールを破ることはない。

しかし，掃除の時間，自分の役割が決まっていない時には，「そんなルールがあるなんて知らなかった」「ルールがないから，自分がやりたいことをした」と言って，役割分担を巡って争う姿が見られる。そして，自分勝手な行動を取ってしまったのは，ルールがないことが理由だとして，自らを省みようとしめないこともある。また，給食を配っている児童がおかずをこぼした時には，多くの児童が集まって片付けを手伝う姿が見られるが，誰がこぼしたか分からないおかずが落ちていても，進んで片付ける姿は，あまり見られない。

これは，決められたことや言われたことのような「ルール」だけが児童の行動の規範になっており，ルールのあるなしに関わらず，迷惑をかけないように，周りの人のことを考えて，行動しようとする気持ちが十分育っていないからであると考えられる。

(2) 学習内容

公徳心とは，社会生活の中で，周りの人に迷惑をかけないように，規範に基づき主体的に判断し，適切に行動しようとする気持ちである。

社会生活の中には，一人一人の公徳心によって成り立っている場面が多い。いつもルールが決められ，分かりやすく表示してあるというわけではない。このような時には，周りの人に迷惑をかけないように，マナーを意識して行動するなど，自分のことだけでなく，周りの人のことを考えて行動することが大切である。このような時に求められるものが，公徳心である。

しかし，社会の中には，自分の気持ちを優先して，自分勝手な行動をする大人もいる。このことは，『小学校学習指導要領解説道徳編』の「社会全体のモラルの低下への対処」（21ページ）でも，「児童が感化され影響を強く受ける社会全体のモラルが低下している」と述べられている。社会全体の規範意識の低下が，児童の豊かな心の成長にも影を落とし，児童が本来もっている，人間としてよりよく生きようとする力を弱めさせかねない状況にあると言える。

すべての場面で厳しいルールを決め，それに基づいて行動しなければならない社会であったら，非常に窮屈な社会になってしまう。そのため，一人一人が自分中心の考え方ではなく，公徳心をもって行動できるようになることが望まれる。

そこで，集団における自己の役割の自覚が進むこの時期に，公徳心の大切さを感じ取り，社会の一員として互いに支え合っていこうとする気持ちをもたせたい。

(3) 資料の解釈と取り扱い

主人公の父親は、阪神・淡路大震災で被災した。大震災直後には、水を求めて給水車の前に並ぶ場面を始め、代替バスを待って並ぶ場面など、人々が並ぶ場面が数多くあった。無秩序になりがちであるが、このような状況下でも、列を乱さず、きちんと並んで待っていた。極限状態にあっても、並ぶことができた日本人の秩序ある行動を、父親は「並ぶことはみんなが生きること」と、主人公に語った。

本時では、「並ぶ」ということに着目して、人々が並ぶわけやその時の気持ちを捉えさせる。みんなが生きるために大切なことを考えさせることにより、公德心の大切さを感じ取らせる。さらに、児童一人一人が持っている公德心にも気付かせたい。

まず、給水車が見え、一目散に走り出した時の人々の気持ちを考えさせる。次に、給水車の前に一本の長い列ができた場面で、人々が並んだわけやその時の気持ちを考えさせることで、極限状態にあっても、周りの人のことを考えて行動することのすばらしさを感じ取らせる。そして、「並ぶことはみんなが生きること」の意味を考えさせることで、どんな時でも、公德心をもって行動することの大切さに気付かせる。

(4) 「規範」の関連プログラムの中での位置付け

1学期には、「ルールはどうしてあるの?」というテーマで、特別活動、総合的な学習の時間、国語科、道徳の時間を関連させて、様々な場面でのルールの必要性、ルールを守るときに大切なこと、なぜルールが必要なのかということなどについて学習してきた。特に、「要」となる道徳の時間では、資料「お話タイム」を扱い、自由とルールについて考えさせた。「周りの人に迷惑がかかったら、それは自由ではない」や「ルールはある程度必要である」という意見があった一方で、「ルールばかりあったら窮屈である」という意見も多かった。話し合いを通して、多くの児童が「周りの人のことを考えた上での自由やルールがあるといい」と考えるようになった。1学期の実践を通して、児童は、ルールの必要性を感じ取るとともに、ルールだけに依存する危うさも感じ取ることができた。

そこで、2学期はマナーに焦点を当てて、実践を行っていく。児童は、本時までにルールの他にマナーというものがあること、世界の中には様々なマナーが存在すること、江戸しぐさのように昔の日本にもマナーがあったことなどを学習している。

そして、「要」となる本時では、マナーを意識して行動する人々の心の根底には、「自分だけでなく、みんなのことを考えて行動する」という公德心があることに気付かせて、迷惑をかけず、周りの人のことを考えて行動しようとする心情を高めさせたい。

3 指導計画（1時間完了）

4 本時の指導

(1) ねらい

どんな時でも、周りの人のことを考えて行動することの大切さに気付き、これからも公德心をもって行動していこうとする心情を高める。【発言・道徳ノートへの記述】

(2) 準備

読み物「苦しいときだからこそ」（『小学校道徳読み物資料集』文部科学省）
プロジェクター、画像、短冊、給水車の前に人々が並ぶ写真、道徳ノート

(3) 関連

5年「青い空」 6年「みんなのために」「シンガポールの思い出」

(4) 指導過程

時間配分	学 習 活 動	教師の指示や発問	予想される児童の発言や心の動き
5分	1 様々な場面で人々が並んでいる写真を見て、並んでいる人の気持ちを話し合う。	① どんな気持ちで並んでいると思いますか。	①【人気のある店に並ぶ人々】 ・早く順番が来てほしい。 ・わくわくするなあ。 ・楽しみだなあ。 【給水車の前に並ぶ人々】 ・暗い気持ち。 ・苦しい気持ち。
22分 (5)	2 資料「苦しいときだからこそ」を読んで、話し合う。		
(5)	(1) 給水車が見えたときの人々の気持ち	② 給水車が見えたとき、人々はどのような気持ちだったでしょうか。	②・早く給水車の所へ行って、水をもらいたい。 ・早くしないと、なくなってしまうかもしれない。 ・こんなにたくさんの人がいなかったら、自分がたくさん飲めるのに。
(7)	(2) 人々が給水車の前に並んだわけ	③ どうして人々は、給水車の前に並んだのでしょうか。 〈中心発問〉	③・みんなが並んでいるから並ばなければいけない。 ・並んだ方が、結局早く順番が来る。 ・落ち着いて冷静に行動した方がよい。 ・みんなに迷惑がかかる。

指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点 と 方 法
<ul style="list-style-type: none"> ○ 始めに、人気のある店に並んでいる写真をプロジェクターで提示して、人々が、楽しみにしている気持ちで並んでいることに気付かせる。 ○ 次に、震災時に給水車の前に人々が並んでいる写真をプロジェクターで提示する。「どんな気持ちで並んでいるのでしょうか」と投げ掛けることで、興味をもって、資料が読めるようにする。 ○ 資料を読む前に、本時の資料は、阪神・淡路大震災の体験談を父親が話すという内容であること、並ぶ場面での人々の気持ちについて考えることを伝えて、震災時に給水車やバスに並んだ人々の気持ちを考えながら、資料を読むことができるようにする。 ○ 資料を読んだ後、阪神・淡路大震災で高速道路の橋脚が倒壊した写真をプロジェクターで提示することで、阪神・淡路大震災の惨状を視覚的に伝える。 ○ 「地面にある水たまりの水でさえ飲みたいと思うほどののどのかわき」と書いた短冊を黒板に貼り、極限状態の中に来た給水車であることを押さえる。 ○ 自分の気持ちを優先したいという人々の気持ちを十分に捉えさせる。 ○ しばらくして1本の長い列ができたことを、場面絵を提示しながら確認する。 ○ 長い列を実感させるために、場面絵だけでなく、長蛇の列を作って、整然と並んだ写真をプロジェクターで提示しながら、③の発問をする。 ○ 並んで待つ人々の不安な気持ちにも気付かせる。 ○ 入浴や炊き出しの配布などの写真を提示して、どんな場面でも、列を作って並んだことを伝える。 ○ バスの中の人々の気持ちについては、深く考えさせることはせず、言い争いになるほどの極限状態にあっても、人々が並んで待っていたことを押さえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 並んでいる人々の気持ちを考えることができたか、発言内容や画像を見る様子からつかむ。 ○ 自分の気持ちを優先したいという気持ちに気付いたか、発言内容からつかむ。 ○ 自分の気持ちを優先したいという気持ちを抑えながら、周りのみんなのことを考えて並んだことを考えることができたか、発言内容からつかむ。

(5)	(3) 父親の言葉の意味	④ 「並ぶことはみんなが生きること」という言葉で、お父さんは、どんなことを伝えたかったのでしょうか。	④ ・どんな場面でも、みんなのことを考えることは大切であるということ。 ・お互いに助け合い、思いやることで、みんなが生きられるということ。 ・人間は、一人では生きられないので、自分だけでなく、みんなが気持ちよく生きることが大切であるということ。
13分	3 みんなが気持ちよく生きるには、どんなことが大切であるか、話し合う。	⑤ みんなが気持ちよく生きるには、どんなことが大切でしょうか。これまでの学習を思い出して、「道徳ノート」に書き、発表しましょう。	⑤ ・自分勝手な行動をするのではなく、周りの人のことを考えて行動することが大切だと思う。 ・海外と日本では、文化の違いはあったが、みんなが気持ちよく生きるという思いは、世界共通だと思う。 ・江戸時代には江戸しぐさがあった。今も昔も、周りの人のことを考えて行動することが大切にされている。
5分	4 みんなが気持ちよく生きることにつながる思いや行動が、身近なところにもあることを感じ取る。	⑥ みなさんの生活の中にも、みんなが気持ちよく生きることにつながる思いや行動があります。	⑥ 〈児童の意識〉 ・自分も、みんなが気持ちよく生きることにつながる行動が、自然ととれているのだ。 ・これからも、みんなが気持ちよく生きていけるように、生活していきたい。

- 「並ぶことはみんなが生きること」と書いた短冊を黒板に貼り、④の発問をすることで、父親が、主人公にどんなことを伝えたかったかを考えさせる。
- まずは、隣同士で話し合わせた後、全体で発表させる。
- 「みんな」の代わりに「自分」と書いた紙を貼って、「自分が生きること」と比べさせることで、「みんな」に着目させ、みんなが気持ちよく生きることの大切さを捉えさせる。
- 児童の発言を「みんなが気持ちよく生きる」という言葉にまとめて、板書する。

【関連する学習内容】

- ・ 江戸の文化（社会科）
- ・ 運動会を盛り上げよう（学級活動）
- ・ シンガポールの思い出（道徳）
- ・ 私たちの当たり前は世界の当たり前？（総合）

- 「規範」の関連プログラムの学習でまとめてきた「道徳ノート」を見直しながら、考えをまとめることを伝える。
- ★ 机間指導をして、自分の考えを書くことができない児童には、関連プログラムで学習してきた内容を挙げていき、その中で、本時の「並ぶこと」と同じような思いや行動がなかったかを想起させる。
- 場面だけでなく、そのときの思いについても、発表させるようにする。
- 東日本大震災で日本人が公德心をもって行動できた写真をスライドショーで見せることで、日本人の規範意識の高さが世界から称賛されたことを伝える。
- スライドショーの後半では、学校生活の中で日常的に行っていることが、みんなが気持ちよく生きることにつながる思いや行動であることを伝えることで、自分たちも、できていることを感じ取らせ、余韻をもたせて授業を終える。

- みんなが生きるとは、みんなが気持ちよく生きられるように、迷惑をかけず、周りの人のことを考えて行動することであることに気付くことができたか、発言内容や発表の様子からつかむ。

- これまでの学習を踏まえ、みんなが気持ちよく生きるには、どんなことが大切かを考えることができたか、発言内容や「道徳ノート」への記述内容からつかむ。

【「関連プログラム」における評価】

- 「マナー」を守って、周りの人のことを考えて行動しようとする意識を高めることができたか、発言内容や「道徳ノート」への記述内容からつかむ。

- みんなが気持ちよく生きることにつながる思いや行動が身近なところにもあることを感じ取ることができたか、スライドショーを見る様子からつかむ。

(5) 板書案

苦しいときだからこそ

地面にある水たまりの水でさえ飲みたいたいと思っ
うほどののどのかわき

給水車が見えたとき

- 早く水をもらいたい。
- なくなってしまうかも。
- こんなにたくさんいなければ、自分がたくさん飲める。

一本の列ができたとき

- 並ばなくてはいけません。
- 並んだ方が、結局早く順番が来る。
- こういうときこそ、冷静に。
- みんなに迷惑がかかる。
- みんなが困る。


並ぶことは
みんなが生きること

- みんなのことを考える。
- 思いやる。
- 助け合う。
- 一人では生きられない。

↓ みんなが気持ちよく生きる

みんなが気持ちよく生きる

- 周りの人のことを考えて
- 思いは、世界共通
- 昔の人も、自分たちも



(6) 「道徳ノート」の活用の仕方

10 / 16 道徳「苦しいときだからこそ」

みんなが気持ちよく生きるには、どんなことが大切でしょうか。

※ 発問を枠囲みで書く。

自分の考え

※ 発問に対する自分の考えを書く。

メモ

※ 授業中に、板書を写したり、友達の考えを聞いて、メモしたりする。

※ 授業後には、自分の考えを書き加えることができる。

※ 教師が授業後にコメントを書く。また、キーワードや思いが書かれた箇所には _____ を、価値ある行動が書かれた箇所には _____ を引く。

(7) 資料「苦しいときだからこそ」(『小学校道徳読み物資料集』より)

「苦しいときだからこそ」

これは、わたしが父から聞いた話です。わたしの父は、阪神・淡路大震災で被災しました。そのときのことを話します。

阪神・淡路大震災は、平成7(1995)年1月17日の午前5時46分に兵庫県の淡路島北部沖の明石海峡を震源として発生したマグニチュード7.3の大地震の被害です。

被害者は、死者6434名、負傷者43792名、避難人数30万名以上という、非常に大変な状況でした。

幸い生き残ることができた父たちですが、鉄道や道路、生活に必要な電気や水道、ガスや電話などのライフラインはとまってしまい、広い範囲で機能しなくなりました。

このような状況では、水を手に入れることも簡単なことではありません。よく暑い夏にのどがかわくことがあります。そんな生易しいものではなく、地面にある水たまりの水でさえ飲みたいと思うほどの、のどのかわきだったそうです。水は、生命の源であり、飲み水の確保は、生きるための第一条件でした。

電気は、一週間ほどで復旧しましたが、ガスと水道の復旧はおくれました。人々は、給水車を心待ちにして、少しでも早く水を手に入れたいと、ただその一心で待ち続けていました。

ようやく、給水車が見えると、父は一目散に給水車の方へ走り出しました。周りの大人たちも給水車のそばへかけよっていきます。

給水車が到着すると、おし合い、へし合い、われ先にと人々が集まりました。しかし、しばらくすると給水車の前には一本の長い列ができたのです。

だれもが生きるために必死でしたが、後から来た人たちは長い列の後ろに並んだのです。自分さえよければそれでいいという人は一人もいませんでした。

水の補給以外にも、入浴や、たき出しの配布、安否確認のための公衆電話、毛布や衣類の配給、避難所のトイレなどで、並ばなければならないこともあったそうです。

一方で、バス乗り場では、次のような話もあったそうです。街灯もない中、月明かりだけをたよりに、こごえそうな体をふるわせながらみんながバス乗り場に並んだそうです。父は、早めにバスに乗車できましたが、後ろの方から言い争いが聞こえてきました。

「おい、もっとつめればたくさんの方が乗れるだろう。」

「これ以上先にはいけないよ。」

「そんなに間が空いているじゃないか。さっさと前に行ってくれ。」

「ここには小さい子どもがいるんだ。これ以上つめられない。」

それを聞いて、父はとても複雑な思いになったそうです。

このような大震災が起こったとき、親をなくした人、子どもをなくした人、家を失った人など、さまざまな状況の中で、みんな並んだのでした。

「並ぶことはみんなが生きること。」

父は、そう話してくれました。

みなさんは、わたしたちの住む日本で、秩序を守る行動が、みんなが苦しいときに行われていることを知って、どう考えますか。